

○今泉 麗\* 芳住邦雄\*\* 樫野悦子\*

(\* 共立女短大 \*\* 共立女大 )

(目的) 染色物の変退色要因として、光、温度、湿度、大気汚染物質が挙げられるが、本研究では、光退色に着目し、促進実験により、染色布の耐光堅ろう度評価する方法の検討を目的としている。従来、耐光堅ろう度の等級付けは視感による評価が基本となっているが、本研究では、これらの評価方法の比較に力点をおいている。

(方法) 試料布として学術振興会第 134 委員会調整の標準染色布 6 種類を用いた。光源として、キセノンアーク灯光を 420nm において  $1.1\text{W}/\text{m}^2$  となるよう放射照度を設定した。試料布とブルースケールを同時に曝露した。視感による堅ろう度の評価には 15 人の被験者を用い、変退色用グレースケールによる標準退色に基づき評価した。一方、計器による評価は曝露前と曝露後にミノルタ製色彩色差計 CR-200 を用い、その反射スペクトルを測定し、寺主の提案する  $N_c$  # 値から等級値を求めた。

(結果) 視感による評価においては、ブルースケールは級が 1 級上昇するとグレースケール標準退色に要する曝露時間がほぼ 2 倍必要となることが認められた。ブルースケールの期待される特性と対応していると言えた。各ブルースケールの曝露時間に対する  $N_c$  # 値の連続的プロットは、こうした視感特性を充分説明しうるものであった。染色布の視感による等級付けと  $N_c$  # による等級付けとは良好に一致することが結論された。